

ハワイ移民資料保存館の日系移民遺産継承活動 ——ビショップ博物館のエスニック遺産——

堀 江里香

1. はじめに

2011年11月、ハワイ州ホノルルのバーニス・P・ビショップ博物館（Bernice Pauahi Bishop Museum）で「伝統と変遷—ハワイ移民の物語（The Tradition and Transition: The Stories of Hawai'i Immigrants）」と題する展示が始まった。これは、19世紀後半から20世紀初頭にかけてハワイに砂糖黍プランテーション労働者として移住した日系、中国系、ポルトガル系、フィリピン系、 코리아系等の移民の日用品、写真、刊行物等を用いて、マルチエスニックなハワイ社会のルーツとなった移民の文化や生活を集めた展示である。この展示のもとになったのは、博物館の敷地内であつて日系組織の後援で運営されていた「ハワイ移民資料保存館（Hawaii Immigrant Heritage Preservation Center、以下HIHPCと略する）」が収集保存したコレクションである。

本稿で着目するHIHPCは、散逸風化の危機にあつた日系移民遺産を継承する目的で日系人有志により設立され、1976年から85年まで運営されていた施設である。HIHPCが閉鎖された後、多文化主義の気運の中でハワイ日系人の歴史文化を扱う施設が相次いで設立された。その筆頭は、1994年に開館しハワイ日系人の歴史を語る常設展を備えたハワイ日本文化センター（Japanese Cultural Center of Hawai'i）であり、その他にも、砂糖黍プランテーション時代の各国からの移民の暮らしを再現した「ハワイ・プランテーション・ヴィレッジ（Hawaii's Plantation Village）」や沖縄からの移民に焦点を当てた「ハワイ沖縄センター（Hawaii Okinawa Center）」等が挙げられる。このようなハワイの日系（または「沖縄系」）の移民遺産を扱う博物館及び文化施設を対象とした従来の研究では、設立の経緯や展示の特徴、変容する日系コミュニティとの関係性、各施設が抱える課題が明らかにされてきた¹。しかし、

これらの研究が対象としたのは 1990 年代以降に設立された施設であり、ハワイ日系移民遺産継承において草分け的な役割を果たした HIHPC に焦点を当てた研究はほとんど行われていない。

本稿の課題は、HIHPC の活動を検証し、従来あまり触れられてこなかった、1970 年代から 80 年代半ばまでのハワイ日系移民遺産継承活動の一端を明らかにすることである。ハワイやポリネシアの先住民文化を主たる対象とする「非日系」博物館であるビショップ博物館で、HIHPC は「日系」の移民遺産継承をいかに進めたのか。能登路雅子は、博物館が「人々が自らの歴史認識や価値観を確認、修正、再構成するアイデンティティ生成の場」としての側面も持つと指摘している²。本稿では、ハワイの多様な人種・エスニック集団の文化とアイデンティティが交錯する場として、HIHPC とビショップ博物館の関係性に着目する。資料については、1970 年代から 2011 年までに発行されたビショップ博物館の機関紙『カエレレ (*Ka`Elele: The Messenger*)』、HIHPC のパンフレット、ハワイ移民資料保存会のニュースレター、『ヒロタイムス』『ハワイ報知』『ハワイヘラルド (*Hawai'i Herald*)』『イーストウエストジャーナル』等の日系エスニック新聞と、筆者が HIHPC の当時の館長と日系資料専門員に対して行ったインタビューを用いる。

2. 日系移民遺産の継承

まず、HIHPC が設立された背景について述べたい。アメリカでは、1960 年代後半から 70 年代にかけ、公民権運動の影響で、大学に新設されたエスニック・スタディーズ学部を中心とする公教育の場で、被抑圧経験をもつエスニック集団の歴史文化が研究、教育されるようになった。公民権運動の影響は博物館や文化施設にも及び、マイノリティが公共空間で自らの視点で歴史を語り、公的な記憶を残そうとする運動が広がった。それ以前は、アメリカの主要な博物館は、エリート白人男性の価値観を反映した「文化の殿堂」であり、マイノリティ集団の歴史や文化の収集展示活動はあまりみられなかった³。

ハワイ州では、1968 年に「元年者」のハワイ渡航から 100 周年を祝う日本人移民 100 周年祭が開かれたのを機に、世代交代が進む中でハワイ日系社会黎明期の移民遺産を継承する組織的取り組みを求める声

が上があった。それは、アイランド・インシュランス・カンパニー創始者のマサユキ・トキオカ（Masayuki Tokioka）、元ハワイ大学イーストウエストセンター副センター長のバロン・ゴトウ（Y. Baron Goto）、『ヒロタイムス』発行者のキヨシ・オオクボ（Kiyoshi Okubo）を中心とする日系人有志により始められた運動であった⁴。

1974年に、彼らの働きかけによりハワイ移民資料保存館協会は非営利団体としてハワイ州より認可された。日系移民遺産を収集保存するための場所として、彼らが望んだのはホノルルの日本総領事館の敷地であった。ところが、日本総領事館より建設の請願書が却下されたことを受け、他の場所が検討された結果、ビショップ博物館より敷地の一部を使用することが許可された⁵。そして1976年、日本万博協会をはじめとする日本やハワイの財界人からの寄付と、ビショップ博物館後援会やハワイ州政府の出資により、ビショップ博物館の敷地内にHIHPCの建物が完成した。翌年には、移民資料保存館協会が募ったHIHPC館長のポストに、ハワイ出身の日系3世の歴史研究家ゲイロード・クボタ（Gaylord Kubota）が、日系資料専門員のポストには戦後日本からハワイに移住した篠藤和子が就いた⁶。

施設の一部にHIHPCを開館することを了承したビショップ博物館は、ハワイ王国を統一したカメハメハ1世（Kamehameha I）の曾孫にあたるバーニス・パウアヒ（Bernice Pauahi）を追悼し、カメハメハ家の財産を相続した夫のチャールズ・ビショップ（Charls Bishop）が、ハワイ王国時代の1889年に設立した博物館である。その目的は、ハワイ先住民が博物館の展示を通して伝統を学び、自らの文化に誇りを持つことができるようにすることであった。19世紀に欧米からハワイ王国にやってきたキリスト教宣教師の子孫や資本家たちはハワイ王国を植民地化していき、19世紀末にはアメリカ化政策によりハワイ先住民の文化は抑圧され、ハワイ語の使用は禁止された。その状況は、1970年代にハワイ先住民の文化や言語を回復しようとするハワイアン・ルネサンスが興隆するまで続いた。失われつつあったフラの文化を伝達し、ハワイ語の翻訳を行ったメアリ・プクイ（Mary Pukui）の活動に代表されるように、ビショップ博物館は、ハワイ州最大の博物館として、ハワイや太平洋諸島の先住民文化の保存と復興に重要な役割を果

たしてきた⁷。

開館以来、HIHPC は、移民資料保存館協会の後援を基盤に日系コミュニティと密接な関係を保ち、日系人の個人や集団の記憶を蓄積する機能を担った。館長に就任したクボタは、1978年1月に『ハワイ報知』を通して、日系人家庭で「古いがらくた」として散逸し続けていた移民遺産の保存に最も重点を置き、1世に対する聞き取り調査も行うことを抱負として述べ、日系コミュニティに支援を呼びかけた⁸。また、HIHPC は、収集した写真、日用品、刊行物等を用いて展示を行った。例えば、1978年にHIHPC ギャラリーで催された「日本人移民の生活」展では、ハワイ日系社会黎明期の砂糖黍プランテーション労働者の衣服や生活用品、家庭用医療品、台所、居室等が展示された⁹。1982年の「ハワイの日本人写真屋」展では、20世紀前半に商業写真の分野で独占的な立場を担うようになった日系人写真家たちについての歴史が特集された¹⁰。この他にも、「マキキ・キリスト教会 75周年祭」(1979年)、「ハワイの着物」(1979年)、「ハワイの相撲と剣道の伝統」(1982年)、「100周年祭」(1985年)など、日系社会黎明期の文化や生活に光を当てる展示が行われた¹¹。

3. マルチエスニックな移民遺産の展示

では、先住民文化の保存と復興を主体とする「非日系」博物館で、HIHPC は「日系」移民遺産継承をどのように進めようとしたのであろうか。そこには、HIHPC のいかなる戦略がみられたのだろうか。

注目すべきは、HIHPC が、日系移民だけでなく、博物館と連携しながら、ハワイの他のエスニック集団に関する展示も行っていた点である。例えば、ポルトガル移民渡航 100周年を迎えた 1978年には、「ようこそ (Boas Vindas)」、「ポルトガルの釜戸」、「ポルトガル移民 100周年」等の展示が企画され、ポルトガル遺産ハワイ評議会 (United Council on Portuguese Heritage) の協力のもと、屋外でポルトガル式釜戸を用いてパンが焼かれ、HIHPC ギャラリーではポルトガル系の歴史文化を伝える写真展が開かれた¹²。同年コリア系移民渡航 75周を記念し、「韓国の国宝級」である 6世紀の金と翡翠の王冠のレプリカが博物館のハワイアンホールに展示され¹³、1980年にはハワイ連合プエルトリ

コ協会（United Puerto Rican Association of Hawaii）の協力で、「プエルトリコ系—ハワイでの 80 年」と題する移動展示がハワイの公立校を巡った¹⁴。また、フィリピン移民渡航 75 周年を祝賀して 1981 年に催された「ハワイのフィリピン系遺産—サカダの年」展では、ハワイフィリピン歴史協会（Filipino Historical Society of Hawaii）の協力のもと、フィリピン系プランテーション労働者の生活を伝える物品や写真が展示された¹⁵。さらに、1979 年に行われたビショップ博物館の創立 90 周年行事には、HIHPC の協力で日系、中国系、コリア系、ポルトガル系等のエスニック文化の展示や舞踏が盛り込まれた¹⁶。

このようなマルチエスニックな展示が行われた背景には、HIHPC が扱う移民遺産について、日系だけでなくハワイの砂糖産業労働者として移住した各国からの移民も含めるといふ、1976 年の HIHPC 設立当時のビショップ博物館館長ローランド・フォース（Roland Force）と理事会による方針があった¹⁷。その方針は、HIHPC のパンフレットにも明記され、「HIHPC の第一の目的は、19 世紀後半から 20 世紀初頭に砂糖黍産業の労働力の需要に呼応してハワイに渡った多様なエスニック集団に関する資料を、研究と展示のために収集、記録、保存することである。HIHPC のコレクションや展示には、中国系、日系、ポルトガル系、プエルトリコ系、コリア系、フィリピン系や他のエスニック集団が表象されている」と記された¹⁸。

そのマルチエスニックなイメージは、クボタの発案による HIHPC のロゴデザインを通して強調された。そのデザインは、ハワイの多様なエスニック集団に共通する歴史的背景である砂糖黍プランテーションを象徴する「砂糖黍用ナイフ」を筆頭に、ポルトガル系の「ウクレレ」、中国系の「そろばん」、日系の「下駄」、プエルトリコ系の「すり鉢とすりこぎ」、コリア系の「長いキセルとばす織り帽子」、フィリピン系の「シバ（ボール）」が、ちりとりでかき集められ瓶の中に「保存」されている様子を描いたものであった¹⁹。HIHPC は非日系のエスニック組織から支援も得た。例えばハワイ中国歴史協会（Hawaii Chinese History Center）は経済的支援を、ポルトガル遺産ハワイ評議会、ハワイ連合プエルトリコ協会、ハワイフィリピン歴史協会等は、HIHPC の展示に対して資料の貸し出しや人的支援を行った²⁰。

このように、マルチエスニックな文化施設として歩んだ HIHPC の軌跡には、母体であるビショップ博物館と折り合いをつけながら、日系人の個人やコミュニティの記憶を蓄積し、当初の目的であるハワイ日系移民遺産継承を遂行した HIHPC のアイデンティティ戦略がみえる。

4. 閉鎖決定の波紋

4.1. ビショップ博物館の意向

では、このような形態で日系移民遺産継承活動を続けていた HIHPC が、1985 年に突然閉鎖されたのは何故なのか。留意すべきは、この閉鎖の決定が、HIHPC 関係者の意思を反映したものではなかったことである。

閉鎖の決定は、1984 年にビショップ博物館の新館長に就任したドナルド・ダックワース (Donald Duckworth) によるものであった。そしてその方針は、750,000 ドルの累積赤字を抱えたビショップ博物館の再生計画の一環と説明された。ダックワースはテネシー州出身で、経営難に陥ったビショップ博物館より「運営手腕を期待され」、ワシントン DC のスミソニアン博物館から赴任した²¹。そして、「コスト削減策」として、HIHPC の閉鎖と日系資料専門員の篠遠和子の解雇を決定したのである²²。これにより、HIHPC の多くのコレクションは博物館の人類学部に吸収され、取り扱う専門員を失うことになった。ダックワースは、予算の削減は痛みを伴うが、現状を直視することが必要で、教育プログラムやコミュニティへの社会事業プログラムを強化することで財政危機を乗り越えたいという見解を示した²³。

これらの決定は、HIHPC 関係者にとっては予期せぬ事態であった。HIHPC の発起人で移民資料保存館協会会長のバロン・ゴトウでさえ、篠遠和子の解雇の決定は寝耳に水であった²⁴。1970 年以来ビショップ博物館の人類学部長に就いていた篠遠嘉彦も、「私にも支援者にも何も相談もなく」閉鎖の決定を下した博物館の方針を非難した²⁵。

とりわけ、ダックワースが、HIHPC の移民遺産の収集展示が日系という特定のエスニック集団に偏っていると批判したことは、HIHPC 関係者の反発を招いた。それは、「全てのコレクションが人類学部のコレクションとしてみられるべき」であり、「我々 [博物館] が、他の集団

よりも、ある集団の有形文化遺産の方をより大切にしているというように印象は与えたくない」とする見解であった²⁶。ダックワースは、HIHPCの存在により、ビショップ博物館が日系の移民遺産に偏重していると受け取られかねないという懸念を指摘したのである。

ダックワースが述べたように、HIHPCのコレクションの実態は、多様な移民の歴史表象という理念との間に矛盾も呈していた面は否めない。HIHPCでは日系関連のコレクションの数が群を抜いており、開館から1985年までの間にHIHPCが収集した移民の歴史と生活を表象する文物や写真の多くが、日系の移民遺産であった。そして、その期間にHIHPCが催した展示のうち、日系に関するものが約半数を占めていた²⁷。

HIHPCの閉鎖に伴い日系資料専門員の職を解任されることになった篠遠和子は、アメリカ本土出身の白人であるダックワースのジャパン・バッシングが、日系人の移民遺産を中心とするHIHPCの閉鎖の背後にあるとみた²⁸。1980年代、アメリカ本土では日本車の大量輸入や日本の急激な経済進出による日米貿易摩擦を背景に、日本人に対するバッシングが高まりをみせた。ハワイにおいては、日本企業による不動産の買収が日本人に対する反感をもたらし、目覚ましい社会上昇を遂げたハワイの日系人には、政府や公職を「独占」する支配的なエスニック集団として、アメリカ本土出身の白人を含む非日系人から厳しい目が向けられることも少なくなかった²⁹。篠遠嘉彦も、HIHPCの閉鎖は「ハワイの社会を真に理解しない[アメリカ本土出身者である]博物館幹部のジャパン・バッシング」の表れであると述べた。篠遠によれば、ビショップ博物館は、ポリネシアの文化の保存、研究を主体とする博物館ではあるが、「ハワイは移民史なしに語れない」うえに、HIHPCの設立の背景からして「日系人中心になることは仕方のない事」であった³⁰。HIHPCを協賛してきたハワイ大学エスニック・スタディーズ学部の学部長フランクリン・オウドウ(Franklin Odo)は、HIHPCでは日系の歴史表象に比重が置かれている点は認めつつも、日系資料専門員を「排除」することによってその状況を改善できるわけではないと指摘した³¹。また、HIHPCの発起人の一人であるキヨシ・オオクボは、ビショップ博物館が「我々が抱いているような移民資料こそ吾が命とい

う精神」を持ち合わせているか疑問視していたと述べ³²、ダックワースの決定は「白人優越主義」の表れであると批判した³³。このように、博物館の決定は、HIHPC 関係者の反発を招く結果となった。

4.2. 閉鎖から「伝統と変遷」展まで

HIHPC の閉鎖後、日系コミュニティからは、日系移民遺産継承の後退を危惧する声が上がった。それは、「官約移民 100 年祭の看板が出たままの展示室の展示物には 2 年前の 100 年祭以来手がつけられた様子がない」状態や³⁴、適切な温度調節設備や保管施設を備え、日系移民遺産を所蔵する「唯一の場所」であった HIHPC がビショップ博物館の人類学部に吸収され「存在しているのかさえわからない」状況に陥っていることを憂う声であった³⁵。こうして、ビショップ博物館を拠点に 1970 年代から加速した日系移民遺産継承活動は、突然休止に追い込まれたのである。

HIHPC の閉鎖後、ハワイ移民資料保存館協会は、ハワイ移民資料保存会と改称し、1987 年以降新たなプロジェクトを始動した³⁶。そのプロジェクトを担ったのは篠遠和子であり、2011 年までボランティアとともに資料をデジタル化する作業を推進した。2001 年にダックワース館長が退任した後、再び博物館で日系移民遺産の展示が行われることを望んだ篠遠は博物館と交渉を行い、2009 年に博物館は展示を開始する計画があることを発表した³⁷。そして、HIHPC が収集保存したコレクションをもとに、2011 年より 2 年半の予定で博物館のキャッスル記念館で開始された「伝統と変遷」展は、博物館が HIHPC の閉鎖以来、初めて移民遺産を扱った大規模な展示となった³⁸。そこでは、日系移民の歴史を中心に、多文化社会ハワイの形成に影響を与えた多様な移民集団の生活や文化が展示され、混血化にも焦点が当てられた。

「伝統と変遷」展にみるように、1970 年代から 80 年代にかけて HIHPC が散逸の危機にあったハワイの多くの移民遺産を収集保存したことは、ビショップ博物館で再評価される傾向にある。博物館の現館長のブレア・コリンズ (Blair Collins) は、「伝統と変遷」展について、ハワイに移住した全エスニック集団がハワイにもたらした「多様性を祝福するもの」であると述べ³⁹、また、展示のディレクターを務めるべ

ティ・カム (Betty Kam) は、ハワイ史はハワイ先住民に限定されたものではなく、移民の物語は多文化社会ハワイの「我々の現状を理解する上でとても重要である」と述べている⁴⁰。先住民系のビショップ博物館における移民遺産の保存展示の意義を強調したコリンズとカムの語りは、HIHPC の閉鎖が決定された 1985 年当時とは博物館の姿勢に変化が生じていることを示唆するものである。そして、それは多文化社会ハワイにおけるビショップ博物館のアイデンティティの一端を示している。

5. おわりに

HIHPC は、ハワイの日系移民の個人やコミュニティの記憶を継承し、日系人が自らの視点でエスニックな歴史を語り継ぐための公共空間として始動した。ただし、先住民のアイデンティティと文化の再生を主たる目的とする博物館との関係性から、日系以外のエスニック集団の移民遺産も対象とする文化的多様性を博物館に導入することになった。そして、HIHPC の開館から閉鎖までの一連の動きには、先住民と移民にルーツをもつ人々が形成する多文化社会ハワイのエスニック遺産をめぐる、ビショップ博物館と HIHPC のアイデンティティの相克が浮き彫りにされてきた。

1990 年代以降、ハワイには、ハワイ日本文化センターやハワイ・プランテーション・ヴィレッジ等、日系移民の歴史を展示する文化施設が相次いで設立された⁴²。そして、HIHPC が収集保存した日系移民遺産は、元日系資料専門員の篠遠を中心とする有志たちの働きかけにより、26 年の空白を経て再びビショップ博物館で展示された。HIHPC は、志半ばにしてその組織的活動に終止符が打たれたものの、日系人の世代交代と混血化が進むハワイにおいて、日系移民遺産を継承する草分け的な役割を果たしたといえよう。

※ 本稿は、2012 年に名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出した博士論文「官約移民『後藤潤』像の変遷—ハワイ日系社会黎明期の記憶をめぐって—」の 3 章の一部を加筆修正したものである。

注

- 1 秋山かおり「展示『祝！ハワイにおける日本の“お祝い”の発展』にみる歴史観点からの独自文化表現』『博物館雑誌』36.1 (2010年)、123-140頁；城田愛「ハワイの日系・沖縄系移民社会の歩みと動き—博物館にみる生活文化の過去、現在、未来」後藤明、松原好次、塩谷亨編『ハワイ研究への招待—フィールドワークから見える新しいハワイ像』（関西学院大学出版会、2004年）、137-154頁；高木（北山）眞理子「ハワイ・プランテーション・ヴィレッジ—ワイパフに『労働者の過去』を再現する」北米エスニシティ研究会編『北米の小さな博物館—「知」の世界遺産』（彩流社、2006年）、228-235頁；森仁志『境界の民族誌—多民族社会ハワイにおけるジャパニーズのエスニシティ』（明石書店、2008年）、99-105頁。なお、HIHPCが収集した日系移民遺産の中には沖縄系の移民遺産も含まれていた。本稿では日系と沖縄系を区別せずに論じることにする。
- 2 能登路雅子「歴史展示をめぐる多文化ポリティクス」油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ—揺らぐナショナル・アイデンティティ』（東京大学出版会、1999年）、187-208頁。
- 3 同上書；山本恵理子「自らの歴史を語る空間—エスニック博物館」田中きく代、高木（北山）眞理子編『北アメリカ社会を眺めて—女性軸とエスニシティ軸の交差点から』（2004年、関西学院大学出版会）、263-264頁。
- 4 「ハワイ日本人移民史資料保存館の主意書」『ヒロタイムス』（1984年10月1日）、1頁。
- 5 同上書。
- 6 「ハワイ移民資料保存館の経営について」『ヒロタイムス』（1986年1月1日）、1、6頁。
- 7 *Restoring Bishop Museum's Hawaiian Hall: Ho`i Hou Ka Wena I Kaiwi`ula*, (Honolulu: Bishop Museum Press, 2009), 1-2. なお、博物館の財源は、博物館後援会の会費や寄付、ハワイ州政府の出資、入場料等である。
- 8 ゲイロード・クボタ「ビショップ博物館ハワイ移民資料保存館—昨年の回顧と新年の抱負」『ハワイ報知』（1978年1月1日）、4頁。
- 9 “New Hawaii Immigrant Heritage Preservation Center Exhibit,” *Ka `Elele: The Messenger* 5, no. 5 (1978): 3.
- 10 クボタ「ハワイの日本人写真屋さん—その源流をたずねて」『ハワイ報知』（1982年5月21日）、5頁。
- 11 HIHPC, “Brochure,” November 1982.
- 12 “Portugese Oven Gift,” *Honolulu Star-Bulletin*, 30 September 1978, A-9.
- 13 “Exhibit Honors Korea Week,” *Ka `Elele* 5, no. 2 (1978): 2.
- 14 “Artmobile,” *Ka `Elele* 7, no. 9 (1980): 9.

- 15 “Exhibition of Filipino Heritage in Hawaii Opens December 20,” *Ka `Elele* 8, no. 10 (1981): 1-2.
- 16 HIHPC, “Bishop Museum’s 90th Anniversary Celebration,” brochure, December 1979.
- 17 篠遠和子、筆者によるインタビュー（2010年6月24日、ハワイ州ホノルル、テープ録音）。
- 18 HIHPC, “Brochure.”
- 19 “Preserved Ethnic Heritage,” *Ka `Elele* 7, no.6 (1980): 2; Gaylord Kubota, interview by author, tape recording, Puunene, Ha., 21 June 2010. クボタは1982年にHIHPC館長の職を退いた。
- 20 HIHPC, “Brochure.”
- 21 “Museum Planning Is Strong Suit of New Director,” *Ka `Elele* 11, no. 6 (1984): 1.
- 22 Karleen Chinen, “Troubled Times for HIHPC,” *Hawaii Herald*, 19 July 1985, 1, 12.
- 23 “Report of the Director Bishop Museum,” *Ka `Elele* 13, no. 1 (1986): 3.
- 24 Chinen, *ibid.*
- 25 イーストウエストジャーナル社『がんばるハワイの新一世』、(イーストウエストジャーナル社、1992年)、226-227頁。
- 26 Chinen, *ibid.*
- 27 HIHPC, “brochure”; 篠遠、インタビュー。
- 28 篠遠、インタビュー。
- 29 Franklin Odo, “Fifth of a Six-Part Series: The Rise and Fall of the Nisei,” *Hawaii Herald*, 19 October 1984, 14.
- 30 イーストウエスト社, *ibid.*
- 31 Chinen, *ibid.*
- 32 「ハワイ移民資料保存館」『ヒロタイムス』
- 33 「ホノルルのハワイ移民資料保存館の閉鎖問題」『ヒロタイムス』(1986年6月15日)、1頁。
- 34 「揺れるハワイ移民資料保存館」『イーストウエストジャーナル』(1987年7月1日)、1頁。
- 35 Arnold Hiura, “Preserving Our Heritage,” *Hawaii Herald*, 3 April 1987, 3.
- 36 資料の保管や運営のための費用については、博物館がその半額を負担し、不足分は移民資料保存会がコミュニティから寄付を募った。Hawaii Imin Shiryo Hozon Kan, “Press Release,” 8 June 1987.
- 37 “Japanese Immigrant Collection,” *Ka `Elele* (Summer 2009): 14.
- 38 “Tradition and Transition: Stories of Hawai`i Immigrants,” *Ka `Elele* (Fall 2011): 6-7. 展示は、アツヒコ&イナ・グッドウィン・タケウチ基金と移民資料保存会の協費で行われた。
- 39 “From the President,” *Ka `Elele* (Fall 2011): 3.

- 40 ただし、カムは日系移民の資料が突出する博物館のコレクションを背景に日系移民の展示に比重が置かれた点について、今後より「適切な」歴史表象を目指し展示を徐々に変更する計画があると述べている。Joe Udell, “‘Tradition and Transition’: Bishop Museum Exhibit Examines the Impact of Hawai`i’s Immigrant,” *Hawai`i Herald*, 6 January 2012, 7-9.
- 41 なお、先住民の歴史文化の展示に関する博物館の近年の変容については、秋山かおり「ビショップ博物館の新しい夜明け—ハワイアンホール改装プロジェクトの必要性—」『博物館雑誌』35.2（2010年）、35-47頁を参照。
- 42 HIHPCは、散逸し続けていた日系移民遺産の収集保存に最も重点を置いた点でこれらの文化施設と異なる特徴がみられる。